

二. 両国における循環器疾患の研究・予防・治療を促進するための医療経済学的分析

D. 考察

この日米共同研究は、1981年から始まり、今日に至るまで続けられて来たもので、日米をまたがる数々の比較研究の土壌となった。例えば、共同研究の一つとして、広島在住の日本人とハワイ、ロスアンジェルス在住の日系三世についての比較研究(Ni-Hon-San Study)がある。この研究では、遺伝形質が類似した集団（主に広島県出身）の日本人が後天的に生活環境が変わったら循環器疾患発症および危険因子にいかなる差異が現れるかという問題が追求された。

時代が変わり、遺伝子分析技術の格段の進歩により、循環器疾患の発症と危険因子が遺伝子レベルで分析される時代となった。例えば、今回の合同会議で分担研究者、馬場俊六が ACE 遺伝子の多型性と高血圧の関連について報告した。この報告は、米国の白人の男性で ACE 遺伝子の DD 型に高血圧が多いという Framingham 研究の成績と一致するもので、異なった人種において遺伝子がどのような役割をはたしているかが判り、意義深い研究成果である。また、近年日本人に糖尿病に罹患する人が多いことが注目されているが、この点に関しても着々と遺伝子レベルの分析が進められており、この病態についての日米比較が待たれる。

このような医学が進歩した時代に、日米の比較研究は益々意義深いものがあり、本共同研究はこの目的に沿った研究を促

進し、実現する最高の場を提供している。

本研究では、この研究活動により多くの研究者の参加を呼びかけ、日米共同研究の機会を広げるよう情報提供を行っている。

E. 結論

我が国のライフスタイルの変化は動脈硬化性疾患の危険因子を増加させている。同時に高血圧の関与も依然として大きいことが判明した。これらの危険因子に対する対策、特に地域医療での実践は極めて重要である。高齢者における心血管系合併症の発症には従来からいわれてきたもの以外の危険因子の関与の可能性も考えられ、解明が必要となっている。日米合同会議では分子生物学・遺伝疫学など新しい手法による病因・病態の解明によって得られた知見を循環器疾患の予知および対策に積極的に応用する必要があることも確認された。

F. 研究発表

論文発表

1. 論文発表

- ① Hattori Y, Suzuki M, Tsushima M, Yoshida M, Tokunaga M, Wang Y, Zhao D, Takeuchi M, Hara Y, Ryomoto KI, Ikebuchi M, Kishida H, Mannami T, Baba S, Harano Y: Development of approximate formula for LDL-apo B and LDL-Chol/LDL-apo B as indices of hyperapobetalipoproteinemia and small dense LDL. *Atherosclerosis* 138: 289-299, 1998
- ② 寺尾淳史、小西正光、馬場俊六、万波俊文:都市の一般住民におけるたばこ

煙暴露状況。喫煙の生化学的指標を用いた分析。日公衛誌 45: 3-14, 1998

2.学会発表

- ① Katsuya T, Baba S, Higaki J, Mannami T, Sato N, Ogata J, Ogihara T: The deletion polymorphism of the angiotensin converting enzyme gene increases the risk of hypertension in a large Japanese general population: The Suuita Study. 71st Scientific Sessions of American Heart Association. Dallas, Texas, USA, 1998

3.知的所有権の取得状況

なし

